ISSN 1346-2601 (Print)
ISSN 2436-5408 (Online) 2024 年 3 月 11 日公開



# ＜第120回　国際ARCセミナー（松田　陽氏）レビュー＞
# 歴史とお話のはざま：須磨寺のヒストリア

石松　智子（立命館大学大学院文学研究科）
E-mail gr0623xv@ed.ritsumei.ac.jp

## 1.　はじめに

本稿は、2023 年6月 21 日に行われた「第 120 回国際 ARC セミナー」における松田 陽氏（東京大学大学院人文社会系研究科　准教授）の講演について報告するものである。松田氏は、将門塚、ナポリのドゥオーモ、須磨寺を対象として、伝説と人々の関わり方、その結果生み出された物事・文物に着目しながら、「文化遺産に真実性は必要か？」という問題を提起された。特に須磨寺では、歴史・伝説・作り話に人々が長年関わる中で、多くのものが生み出されており、様々な資料を用いて論じられた。

## 2.　講演内容

講演の始めには「歴史」、「伝説」、「真実」、「現実」、という単語が紹介された。「伝説」は「歴史」・「真実」・「現実」とは異なるものとして捉えられ、単語は大きく二つのグループに分類された。しかし、「真実」ではなかった「伝説」が、「現実」のものとなり、「歴史」となった事例が存在するとして、まずは将門塚を紹介された。

### 2-1.　将門塚

将門塚は、現在も東京都千代田区に所在している。平将門が940（天慶3）年に討死し、京都でさらし首にされたのち、首が京都から武蔵野国豊嶋郡芝崎村に飛んだという伝説が存在し、後に塚が建てられた。1307（徳治2）年、真教が荒れた塚を修復して、「蓮阿弥陀仏」の法名を贈り、自ら揮毫した板碑を建立し、そばに建っていた日輪寺にて供養したとされている。将門の霊は、神田明神で祀られるが[1]、日輪寺でも今日まで将門信仰が伝えられてきた[2]。

塚は江戸時代、姫路藩・酒井雅楽頭家の上屋敷の中に取り込まれる。『俚俗江戸切繪圖』（日文研 DB、安政時代）から、その位置が確認できる。

明治時代、同敷地には公議所に続き、大蔵省の初代建物が建設される（1887～1923 年）。『風俗画報』新撰東京名所図会 175 号（東陽道、1898）、『日露戦争寫真画報　臨時増刊』第 33 巻（博文館、1905）、織田完之『平将門故績考』（碑文協会、1907）の絵図や写真から、灯篭や塚の様子が伺える。

1907 年、板碑と故蹟保存碑が建立される。これらは、戸川残花「保存すべき都下の名勝風致」28 頁（『美術新報』13 巻7号、画報社・東西美術社、1914）、戸川安宅『東京史蹟写真帖』14 頁（画報社、1914）で確認できる。

1923 年、関東大震災により大蔵省の初代建物が焼失し、1924 年、その跡地に仮庁舎を建てる際に、塚の小山が壊される。鳥居龍蔵『上代の東京と其周囲』（磯部甲陽堂、1927）では関東大震災後の塚が、佐藤隆三『江戸伝説』（坂本書店出版部、1926）では壊される塚の様子が、それぞれ写真で確認できる。

1926 年、第一次若槻礼次郎内閣で大蔵大臣であった早速整爾が突然死する。1927 年、大蔵省営繕管財局技師で工事部長であった矢橋賢吉が急逝する。仮設庁舎建設の際の祟りが噂されるようになり、1928 年、鎮魂祭を行う。当時の新聞（1928 年3月 27 日付、東京朝日新聞夕刊、2面・読売新聞朝刊、7面）に記事が掲載される。

1941 年、凶事が続き、厄払いのため大蔵省は震災後に移動し荒廃していた故蹟保存碑を元の塚にて新たに建立し、地鎮祭を行う。当時の新聞（1941 年3月 13 日付、読売新聞朝刊）に記事が掲載される。

1961 年、戦後の駐留軍の施設（パーキング場）により荒れたため、地元有志、銀行などによって修復され、慰霊大祭が行われる。当時の新聞（1941 年 12 月 16 日付、読売新聞朝刊）に記事が掲載される。

1971 年、東京都文化財（旧跡）に指定される。安西篤子『東京歴史散歩』108 頁（保育社、1976）に掲載される。

2020 年、隣接地の再開発終了後、塚の修復工事が行われる。

2021 年現在においても、将門塚には、たびたび参拝者が訪れている。

### 2-2.　Duomo di Napoli（ナポリのドゥオーモ）

イタリア・ナポリに所在するドゥオーモは、13 世紀に建設された大聖堂であり、地元の人々の信仰の中心となっている。1389 年以来、5 月の第一土曜日、9月 19 日、12 月 16 日に行われる儀式では、「Il miracolo di

San Gennaro（サン・ジェンナーロの奇跡）」を見る大勢の人々で賑わう。その奇跡とは、聖人ジェンナーロの血が入った小瓶が振られると、乾燥していた血が液体に戻るというものである。恐らく多くの人々は、この真実性を認めていなくても、儀式に参加しているものと予想される。

### 2-3. 須磨寺

須磨寺は兵庫県神戸市須磨区に所在する。寺の特徴として、①須磨を代表する古刹、②源平合戦ゆかりの地、③おもしろ観光 B 級スポット、といった様々な性格を合わせ持つ。

①については、縁起によれば 886（仁和2）年創建とされている。寺宝として、鎌倉末期～室町初期の木造十一面観音立像や、普賢十羅刹女像が所蔵されており、共に国指定重要文化財となっている。

②については、1184（寿永3）年の源平合戦（一ノ谷の戦い）にまつわる様々な伝説や作り話に関連した史跡が境内に数多く存在する。「源平の庭」では、鎌倉時代の『平家物語』敦盛最後の場面が再現されている。庭は 1967 年に完成し、2001 年に改修される。敦盛最後の場面については、以下の通りである。

一ノ谷の合戦で平家が敗北し、船へ逃げようとする平敦盛を源氏の武将、熊谷直実が見つける。直実が呼び止め、引き返してきた敦盛を取り押さえて顔を見ると16、17 歳の若武者であったことから、我が子・小次郎の姿が重なる。敦盛を逃がそうとするが、後ろから源氏の軍勢 50 騎が迫っていたことから、直実は後世を弔おうと泣く泣く自らの手で敦盛の首を斬り、主君である源義経に首を見せる。腰にさしていた笛を見て若武者が敦盛だとわかる。戦場に笛を持参するその風雅に感嘆し、後に直実が出家するきっかけとなる。笛は「小枝」と呼ばれ、敦盛の祖父・忠盛から父・経盛、そして敦盛へと受け継がれたものであった。

上記の場面は、『平家物語』・『源平盛衰記』以外にも、能『敦盛』・幸若舞『敦盛』、歌舞伎『一谷嫩軍記』で取り扱われており、江戸時代前期の『源平合戦図屏風』にも描かれている。

その他、境内にある「源義経卿腰掛松」は、主君・源義経がこの松に座って敦盛の首と笛を実検したとされている。史料に見る初出は 1661 年『當山歴代』である。「敦盛卿首洗池」は、首実検の前に斬った敦盛の首を洗い清めた池とされている。「平敦盛卿首塚」は敦盛の首を埋葬する地とされている。

宝物館では寺宝として「青葉の笛」と「高麗笛」が公開されており、敦盛の所持品として紹介されている。「青葉の笛」についての最古の記録は、1427（応永 34）年であり、須磨寺が「小枝笛」を所持していたとの記述が確認されている。1526（大永6）年には「青葉の笛」が十日間展観されている。「青葉の笛」の由来については、弘法大使（空海）が唐への留学中、長安の青龍寺の竹（天笠の竹）で笛を作り、帰国後に嵯峨天皇に献上され、嵯峨天皇が「青葉の笛」と名付けた後、皇室から平家の手に渡ったとされている。1710（宝永7）年『兵庫名所記』には「青葉の笛　弘法大使作」と紹介されている。1906（明治 39）年には文部省唱歌「青葉の笛」が制作されている。

③については、住職によってユニークな置物が設置されている。住職が第二次世界大戦のシベリア抑留で壮絶な経験をしたことから、参拝者が笑顔になるようなことをしようと、参拝者が撫でると手が動く「五猿」や、ボタンを押すと唱歌「青葉の笛」のメロディーが流れるなどの、様々な仕掛けが施された置物が設置されている。新聞（2019 年6月5日付、神戸新聞 NEXT)にはその関連記事が掲載されている。

なお、須磨寺が言及されている近世の名所記、名所図会、旅日記は、1650 年『兵庫須磨名所記』を始めとして 1855 年『西遊草』まで合計 22 点が確認されている。古文書・地図・摺物では、1498 年『沙門弘源勧進帳』に残る古文書を始めとして、合計5点が確認されている。近代の書物では合計 13 点が確認されている。

以上のことを踏まえながら、松田氏は「数百年にわたって、過去に関する「お話（歴史・伝説・作り話）を介して人々は須磨寺と関わってきた」[3]こと、「その中で現実に創出された様々な事物・文物」[4]が存在していることを明らかにした。その結果、真実ではなかったお話が、人々との関わりの中で現実のものとなることが示された。

## 3. おわりに

将門塚や須磨寺のように伝説や作り話は、日本各地に存在している。例えば弘法大使や役行者、天皇、戦国武将など、歴史上の有名人物が関わったとされるものが多く見受けられる。現在の私たちがそのようなお話やゆかりの地を知ったり、見たりすることが出来るのは、人々が関わってきた中で、言い伝えや記録、碑などが残されてきたからである。それは紛れもない事実であると言えよう。もし文化遺産に真実性が必要とされるならば、たとえ真実性の乏しい伝説や作り話が対象であっても、松田氏の研究のように、人々がどのように関わってきたのかを丁寧に探究し、生み出されてきたものを検討することで、改めて文化遺産として向き合うことができると言えよう。

［注］

1) 同社は 1616（元和2）年、現在地に移転した。
2) 江戸時代に数回移転し、明暦の大火の後に現在の西浅草に移転した。幕末まで神田明神の別当であった。

3) 立命館大学アート・リサーチセンター「第120回　国際ARCセミナー」松田　陽氏のスライドより引用。
4) 同上より引用。

［参考・引用資料］

立命館大学アート・リサーチセンター「第120回国際ARCセミナー」松田　陽氏のスライド